

★世界の食卓 ー第7回ー

魚好きの遊牧民：  
アラル海周辺に住むカザフ族の苦難

独立行政法人国立健康・栄養研究所 佐々木 敏

カザフ族の「カザフ」には、「自由な戦士」「ステップの放浪者」という意味があると言われている。カザフスタン共和国の主要民族であり、一部は中国やウズベキスタン、モンゴルにも住んでいる。彼らの代表的な料理と言えば、クミス（馬乳酒）、カズイ（馬肉ソーセージ）、ビシュマルマク（羊の茹肉を手作りのラザニア状のパスタの上に乗せた料理）があげられる。さすが、遊牧民の血を引くというだけあって、肉、肉、肉のオンパレードである。ところが、面白いことに、アラル海東南岸地域に定住したカザフ族は、例外的に“魚好き”である。この地域のカザフ族は、恵まれた水資源をもっていた。琵琶湖の100倍の面積をもち、世界第4位の広さを誇る汽水湖・アラル海、そこへと流れ込む2つの大河（シルダリアとアムダリア）、そして、周辺の支流や用水路。豊かな水で育つ魚や水辺に集まる野鳥は、そんな彼らにとって、なくてはならない貴重な食べ物であった。ところが、この魚好きの遊牧民はその後、大きな異変を経験することとなる。

シルダリアとアムダリアの豊富な水を利用して、ソビエト政府が大規模な綿花栽培を開始したのは、1930年頃のことだった。そのとき作られた灌漑用水路は原始的なもので、水留めの工事がじゅうぶんに施されなかったため、相当量の水が乾燥した地中に漏れ出してしまい、実際に農地に届いた水は、ごくわずかだったという。その結果、流入量が激減して湖は次第に縮小し、1997年には、湖水面積が1960年の4割足らなくなってしまった（地図：アラル海縮小経過図）。さらに、湖水の塩分は3.5倍から6倍程度にまで濃縮され、湖に生息していた魚のほとんどが死滅した。シルダリアとアムダリアは、アラル海に注ぐ直前の下流域でも小さな川のような細さとなってしまった。最近では少し復活してきたといわれているが、大河だった頃の面影は、今はもうない。湖の魚は死滅し、河や用水路で獲れる魚も激減した。それでも、今もなお、彼らの魚嗜好は残っている。調査中に立ち寄った家の台所では、鯉に似た魚がぶつ切りにされて洗面器に放り込まれているのを見かけた（写真1：村人の家の台所で見つけた魚）。

湖の縮小は、周辺地域の気候も変えてしまった。“砂漠化”である。砂漠化は、飲料水源として使われている河や井戸水の水質の悪化、特に高塩分化につながる。これが原因かどうかまだ明らかではないが、われわれの調査によって、この地域の子どもたちが、世界でも類を見ないほどの高頻度で腎臓の障害に犯されていることがわかった。この地域では、水汲みは子どもたちの仕事である（写真2：井戸へ水汲みに来た少女。後方に彼女たちの村が小さく見える）。苦勞して毎日運んでいる水のために、子どもたち自身が病気になってしまっているとしたら、これほどかわいそうなことはない。

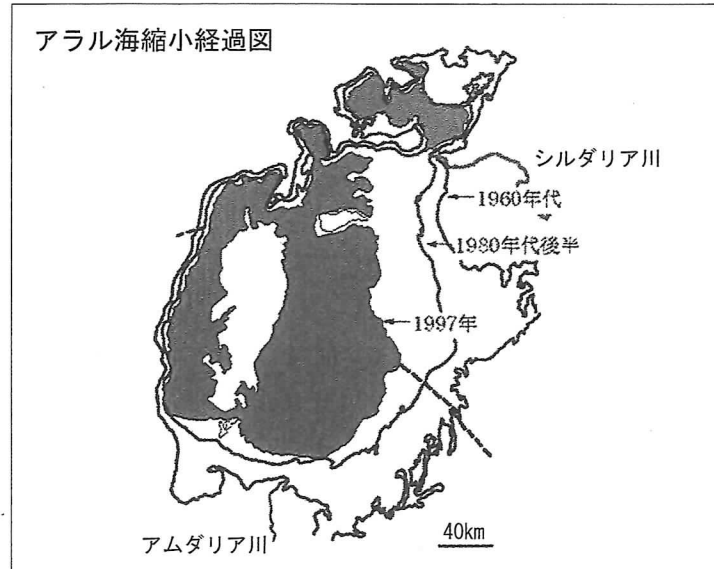
話はこれだけでは終わらない。シルダリアとアムダリアの上流には数多くの鉱山がある。そして、その鉱山から出た重金属を多量に含む廃液が、河に捨てられたという噂がある。われわれが調査した限りではその可能性は低いものの、第2のイタイタイ病や水俣病を心配する声が絶えない。綿花栽培に大量に使ったダイオキシンが流れてきている可能性もあるという。また、砂漠化した湖の底からは塩類の微粒子が風で飛ばされ、肺の奥深くに入ってしまうという話もある。この地域に住む子どもたちの間では腎臓だけでなく、原因不明の病気が数多く発生している。環境汚染の話を始めたら可能性は尽きない。かつてカザフ族に恵みをもたらしていた豊富な水は、地中へと消え、砂漠へ姿を変えてしまった。そして、今や湖の周辺には、水ではなく、数多くの深刻な問題が溢れているのである。アラル海の水と富に引き寄せられ、魚好きに変身した遊牧民は、今、たいへんな苦境に立たされている。



写真1：村人の家の台所で見つけた魚



写真2：井戸へ水汲みに来た少女



※出典

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科  
インターネット講座：第1回「水と人とのあるべき開発を求めて 水の地域特性と生態環境」東南  
アジア地域研究専攻 石田紀郎（生態環境論講座）  
8 消える湖ーアラル海ー  
<http://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/special/001-8.html>